KONAN UNIVERSITY

競争心についての一考察

著者	青柳 寛之
雑誌名	甲南大学学生相談室紀要
号	4
ページ	13-21
発行年	1997-02-28
URL	http://doi.org/10.14990/00003629

競争心についての一考察

甲南大学学生相談室　青　柳　寛　之

はじめに

大学生の特有の無気力状態を指して「スチューデント・アパシー」という言葉を初めて用いたのは、アメリカのWalters(1961) であった。彼はアパシーを「成熟した男らしさ、効果的な男らしさを形成するというこの時期（青年中期・後期）の心理的作業において、屈辱と敗北とが予想される場合の反応」であるとして、主に男性性と競争のテーマから論じている。笠原（1988）ら日本の研究者も、アパシーの特徴のひとつとして、優勝劣敗への敏感さや傷つきやすさを指摘している。しかし記述的な研究が多く、男性性や競争についてはWaltersが論じたほどには取り上げられていない。実際問題としても、アパシー自体はそれを単一のカテゴリーとするのが困難なほど多様な側面を含んでおり、このような単一の主題からその全体像を論じることは不可能であると思われる。そこで本論ではアパシーの全体像を追うことにはこだわらず、むしろアパシーを出発点として、主に「競争」のテーマを取り上げ、より広い文脈の中でその関連を探ってみたい。

1．Waltersのアパシー論における競争の位置づけ

まずはじめに、Waltersのアパシー事例の中で競争がどのうような形で現れ、彼がそれをどのように捉えていたかを検討することにしよう。そのために彼が挙げている事例を、競争のテーマを中心として要約する。

最も典型的な事例は20歳の男子学生のものである。主訴は学業をはじめとして「何かやり甲斐のあるものに関心をもつ」ことができないことであった。患者には数歳年上の姉がいたが、この姉は攻撃的でわがままで、思い通りにするために癇癪を起こすような人だった。しかし能力的に非常に優れていたので、親にも大目に見られていたし、患者には太刀打ちできなかった。患者はいつもこの攻撃的で有能な姉の陰に隠れてしまっていた。子供時代は表面上は姉に愛想良くして、競争を避けていたようである。しかし青年期初期に至って、それまでの鬱憤を表面に出し始めた矢先、父親が病気で動けなくなってしまう。関係の薄かった父親を尊敬し始めた矢先でもあった。この時点で将来に対する無関心が現れていたが、家庭外の生活では自分より優れている人に対して競争心を燃やし、攻撃的な態度をとっていた。このころ始めたトランペットの上達が著しく、その優れた能力により攻撃的態度は許されていた。しかし16歳の頃の３つの事件を機に、穏やかな無関心の態度が習慣的になる。ひとつは以前のバイト先でしばしば衝突していた上司が胃癌で死んでいたことを偶然知って罪悪感と恐怖をおぼえたこと。ふたつめは、件の姉が患者と同じく法律の道に進むことになり、患者が地道にしてきた努力が水泡に帰したと感じ、失意と絶望に陥ったこと。最後のひとつはバンド・マスターと衝突して高校での演奏活動を続けることができなくなったことである。

Waltersは一連の出来事のうち、特に父親の病気とかつての上司の死を重視して、これを「強い男が傷つけられる」テーマとして注目している。そこに、患者の抱いている競争イメージが現れているように思われる。「男たちは強くて、非情で、冷酷で、攻撃的なものであると常に考えられていた。男たちは『前進』しょうと努力して『人を蹴落とし』、そのために人から憎まれる孤独な存在とされていた。…（中略）…この患者にとっては、

男らしさは攻撃性や傷害と同等視されていた。」このイメージには確かに現実的な側面がないではない。支配者や王の孤独と呼ばれるものがそれに当たるであろう。しかしそれだけでは和解なき不毛な競争、というよりも闘争である。実際、患者は人を傷つけたり傷つけられたりすることへの恐れから、強い男になりたいという願望をあからさまにはできなかったのだとWaltersは述べている。この過酷な競争イメージには注目しておく必要があろう。

また、Waltersはこの患者のアパシーの成因として姉との葛藤を重視している。患者は才能があり攻撃的な姉に勝利することによってのみ父親の愛情と尊敬を得られると感じており、さらには母親の尊敬を獲得するには父親を凌駕しなければならないとも感じていたと述べている。これは、もし将来の妻の愛と受容が獲得できるとすれば、それは人生でほとんど勝ち目のないような困難な挑戦に勝利を収めたときにのみ可能になるという空想に結びつく。患者はこのような異常ともいえるほど高いハードルを想定していたことになる。これも患者の持つ競争イメージの一部であると言える。ここには、競争に勝利するという価値への一元化、勝利か、さもなくば無かという、いわばオール・オア・ナッシング的態度を見て取ることができる。これに勝利できなければ父・母そして将来の妻の愛と受容が獲得できないというのは、この患者の競争イメージの過酷さのもう一つの側面であろう。Waltersはそこまで追求してはいないので断言はできないが、このようなイメージからは、競争自体を支えるであろう、周囲に対する基本的な信頼感が不確かであり、逆に競争に勝利して初めて手に入れることができるという事態すら推察可能である。

以上のように、この患者の抱いている競争イメージは、冷酷で、勝利でなければ無といった過酷さを持ち合わせていると言える。Waltersの挙げる2番目の事例でも、患者は「過去の家族の業績を追い越さねばならぬという信念を持」っていた。3番目の事例では家族間、そして患者との言い争いが母親を傷つけ病気にしたという空想があった。4番目の事例では、患者は優秀で人気のある兄・成功者である父と、能力を隠して受動的競争をしていた。はじめの事例以外は必ずしも競争イメージの深刻さは明らかではない。しかしWaltersが「アパシー患者の種々の想念は、激怒と潜在的な破壊性とに満ちている」と述べ、アパシー自体がそのような破壊的想念の表出に対する防衛だとしていることを考慮に入れると、他の事例での競争イメージも、必ずしも生産的なものではなく、破壊的側面をかなり含んだものと推測するのが妥当であろう。少なくとも患者本人は、客観的にはそうでなくとも破壊的だと認識していたのは確かである。

ではWaltersは競争性そのものをどのように位置づけているのであろうか。競争性一般について述べているところを見ておこう。まず大半の高校生が描く男性像について言及し「自分の成功への上がり道を阻むものは誰であろうと挑戦し、たぶん、打ち負かすことができる存在である」としている。この時期は、誰よりも上へ、ということが過剰なまでに強調される。これはアメリカ社会がそのように鼓舞し増幅している側面もあろう。Waltersは「男根的な男性的性の特徴すべてが評価され、女性の特徴は低く評価され、認められない」と述べている。社会自体が競争に対する抑制をはずしている感があり、このような状況では過酷で不毛な競争になる危険をはらんでいると言えよう。かくてこのような攻撃的かつ競争的衝動を使いこなすことは、青年後期の最も厄介な課題のひとつに位置づけられる。その解決のためには攻撃性と競争性の効果、すなわち人を傷つけたり傷つけられたりということに「心を安んじることができねば」ならない。そうして、実際の競争の結果、自分の限界を見いだすことで自らに対する現実的な評価ができるようにならねばならない。ま

た、攻撃性や競争性の逆である優しさを、弱々しさと不十分さと感じることなく大切にできることが重要となる。Waltersは治療論で次のように述べている「自然な男性的攻撃性と女性的優しさの彼独自の表現とを融合させて、能力のより成熟した確立をもたらすような機会に恵まれれば、そうした学生は学業上の競争よりむしろ好奇心や独創性などに重きを置いている教室へ戻って行くであろう」。

このようにWaltersは競争性を、優しさと両輪をなして創造性に寄与する要素とみなしており、その成熟を青年期的課題のひとつと考えているようである。そしてアパシー患者はこの葛藤が解決し難いがゆえに青年後期を遷延させているとしている。確かに競争性の成熟という課題には青年期固有の要素も多く関与しているであろう。しかし、人を傷つけたり傷つけられたりすることへの耐性や、自分の限界を知ること、攻撃性と優しさの融合といった成熟のための条件自体は必ずしも青年期だけのものではない。このような条件や効果をより広い文脈に位置づけるために、次に競争の起源に遡ってみることにする。

2．競争の起源としての同胞葛藤

競争の発達的起源をはっきりと特定するのは難しい。まず考えられるのはエディプス葛藤が生じる時期である。この場合は男の子であれば、母親をめぐって父親と競争することになる。これよりも次の同胞の誕生の方が早いこともあろう。この場合はその新しい同胞と、母親をめぐっての競争である。さらに遡ればKlein学派のように母親（の乳房）と赤ん坊との競争を想定することもできる。これらの観点の違いは、実際の対人関係上の競争であるか、精神内界での想像上の競争であるかといったことを主な論点とする、競争自体の定義に関わっている。しかし、同じ「競争」という名称を与える以外、その本質的形態には共通の要素があるはずである。そこでまず、Waltersの事例でも注目されている同胞葛藤を取り上げることにする。はじめの事例では姉との葛藤、2番目は父親とのエディプス葛藤が前景だが、父親の戦争からの復員に続いて母親が妊娠している。3番目の事例では同胞5人の間での言い争いが主題となり、4番目の事例では優秀な父親と兄に対する受動的競争が示されている。

競争の起源としての同胞葛藤の意義について、Lacan(1938)は、“侵入コンプレクス”として重視している。侵入コンプレクスは、離乳コンプレクスとエディプス・コンプレクスの間に位置づけられており、エディプス・コンプレクスに先立つ同一化の働きがその主要なテーマである。Lacanはその発生時期を“鏡像段階”と呼んでいる。この段階では以下で述べるような同胞との鏡映的関係により自己像の萌芽ができあがる。別の言い方をすれば統一体としてのナルシシズムが生じてくる。このナルシシズム形成における問題点を論じたのがKohut（1971、1978）で、主に母親との病因的関係に焦点を当てている。その一端は青柳(1995)に述べたとおりである。このように考えると、同胞葛藤とナルシシズム形成は表裏の関係にあることがわかるであろう。同じことを本論では同胞葛藤の側から検討することになる。以下の記述はLacan(1938)を拠り所にしている。

同胞葛藤は、家族に新しいメンバーが誕生することをもって始まり、新参者がそれまで母親的人物を独占していた先住者を悩ませるという形を取る。ここに母親をめぐる三角関係の状況が成立し、競争関係が生じる。そこに働くのは嫉妬の感情である。注意すべきはその建設的側面であろう。嫉妬を自覚するには相手がいい思いをしているということがわからなければならない。それにはいい思いをしている相手の位置に自分を置いてみるということが必要である。ここに同一化の働きが認められる。それまでは視界には独占可能な母親しかいなかったのが、自分とよく似た姿形をしたものが一緒に視界に入ってくる。幼児はそれをいわ

ば鏡として、たとえば抱かれる幼児とそれを見る自分、抱かれる自分とそれを見る幼児といったような視点を獲得していく。従って同胞間の競い合いはよく見ると「ふたりの個人間の衝突としてではなく、それぞれの個人の内部で、ふたつの対立的かつ補完的な態度間の衝突として」見える。つまり嫉妬を感じるということは、いい思いをしている相手とそれを眺める自分の両方のイメージが同時に形成されていることを含んでいる。もっと言えば、競争関係の中での同一化を介して、自我と他者が同時に構成されるということになる。「同類によって対象も自我も実現される。すなわち、主体はそのパートナーを同化吸収することができればできるほど、自分の人格性と対象性を同時に強化するし、これらは彼の未来の有能性を保証するものとなる」。

また、競争を通じて、自分と相手以外の第三の対象が生じてくる。掟やルールと呼ばれるものである。「(主体は) ある別の対象に導かれて、これを人間の認識に特徴的な形で、互いに通じ合える対象として受け入れる、というのも競い合いは敵対と和解を同時に意味するからである。けれどもまた同時に、主体は戦いまたは契約の関係が始まる中で他者を認識する。要するに、主体は他者と社会化された対象を同時に見いだす。それゆえ、ここでさらに、人間の嫉妬は直接の生命的敵対関係から区別される、というのも嫉妬は、対象がそれを決定する以上に、対象を形成するからである。嫉妬は社会的感情の原型であることがわかる」。敵対と和解のせめぎあいからルールが形成され、逆にルールの形成を物差しとして相手を認識していく。これにより、直接の敵対関係は間接化され、自己・他者・社会各々のより複雑で確固たる形成へと向かう。なお、和解の基礎には相手の嫉妬への共感性があることは指摘しておく必要があろう。

家族集団への新メンバーの侵入が引き起こす事態の片方について述べてきたが、それはもう片方の事態とかなりクリティカルな二者択一を形成する。後者の事態とは「主体が母親的対象を再び見いだして現実の拒否と他者の破壊にしがみつこうとする」ことである。Lacanは新参者の侵入という外傷に対して患者の役割を演じるのは原則として年長の兄姉であるとし、その反応は侵入時点での彼らの精神発達に依存するとしている。「離乳の混乱の中でたまたま侵入者を迎えた患者は、彼の姿を見るたびに絶え間なく同じ混乱を引き起こす」。早すぎる侵入は外傷となり、ナルシシズム形成には至らずむしろその妨げになる。競争は間接的なものではなく母親を求めて直接相手の破壊を願うことになろう。これに対して「侵入者がエディプス複合のあとではじめて現れる場合には・・・より感情的に濃く、より構造の豊かな、両親的同一化の面で受け入れられる。彼はもはや主体にとって妨害物ないし反射物ではなく、愛または憎悪にふさわしい人物である。攻撃的衝動は昇華されて優しさまたは厳しさになる」。エディプス・コンプレクス以降では、ナルシシズムは同類との鏡映的な関係から前進し、両親との同一化を通じて拡大しているので、いわば“両親のような態度をとれる”状況で新メンバーを受け入れることになる。

このように同胞の侵入による事態の分岐を見てくると、はじめに競争の起源はいつかという問題を立てたが、一般的定義よりもむしろ各個人での起源の方が重要であることがわかる。それにより競争の持つ意味あいが大きく違ってくるからである。

以上の観点からWaltersの論を検討してみよう。彼は競争が生産的になるにはまずは競争性・攻撃性の効果について心を安んじられる必要があると述べている。その耐性・安定性には、その人にとっての競争の起源が反響しているであろう。上に述べたように離乳の混乱の時期が競争の起源ならば、その競争の性質には侵入者を絶滅したいという願望が含まれる。しかも、おそらく母親は自分よりも侵入者を大事にしていると感じられるた

め、相手に対する絶滅願望は母親をも傷つけたと感じられ、当人にも耐え難いものとなる。上に述べた「過酷な競争性」の背景にはこのようなイメージが動いている可能性があろう。直接の生命的敵対関係が生じることになる。心を安んじるにはこの破壊性がさほど危険なものでなくなる必要があるが、それには離乳コンプレクスを起源とする基本的安定感が重要な因子となる。

Waltersは競争性・攻撃性への耐性を前提として、次に実際に競争性・攻撃性を行動に移すことで自分の限界を知り、現実的目標を得ることができると述べている。これは上で述べたような、競争の建設的側面に対応する。競争性をぶつけるのは特定の人かも知れないし、社会であるかも知れないが、それは同一化を介して鏡となり、自己・相手・社会のイメージをよりはっきりしたものとするであろう。青年期は家族から社会へ向かう時期なので、この文脈で、自己・他者・家族・社会の何サイクルめかの再定義が行われると考えられる。その際、その初版がどのようになされたかが、遠くまたは近くで反響しているということになろう。

Waltersは最後に競争性・攻撃性と優しさの融合を挙げている。上で、競争は敵対と和解を同時に意味すると述べた。そのせめぎあいの中から、社会的関係に通じる第三の対象が生じてくる。その生成は創造性につながることになる。また、和解の基礎には相手の嫉妬に対する共感性がある。これらの要素は、結局は競争性・攻撃性が生産的になる条件である。それを支える因子のひとつはすでに述べたように、前段階の離乳コンプレクスを首尾良く通過して基本的安定感を得ていることであろう。その条件が満たされていない場合、たとえば過酷な競争イメージを抱いている場合は、離乳コンプレクスのテーマを扱わねばならないことも生じてくると思われる。

同胞葛藤の観点からWaltersの事例を再検討してみよう。初めの事例では、姉との葛藤が重視され、父親の賞賛を得るには姉に、母親の賞賛を得るには父親を凌駕せねばならぬという空想があったことが示唆されている。この姉との関係を吟味してみよう。この姉は勝ち気で優秀な、しかしわがままで「ごね得」ともいえる性格であったようだ。これに対し子供時代の患者は姉とは対照的に「愛想良くしながら自分の目的を遂げた」。また姉に対しては「甘やかされた無分別な人間だといつも思っていて、彼女に与えられる尊敬と愛情とに対して密かに憤慨していた」。そして「そんなことは別に問題ではないかのように振る舞い、自分もやろうとすれば何でもできるのだという風に見せかけ」ていた。

上に、患者の役割を取るのは原則として年長の兄姉であると述べた。患者の「侵入」を姉の側から見ることができる。姉の高い能力と反面のわがままさからは、この姉が弟の侵入を外傷として体験したのではないかと推測される。少なくともエディプス・コンプレクス以降の侵入で述べたような、厳しさと優しさからなる両親的態度はとっていない。高い能力もわがままさも親の庇護を失う不安と裏腹ではないだろうか。患者の侵入つまり誕生に対して、姉は母親を失うまいと必死だったのだろう。この状況を患者、つまり弟から見るとどうだろうか。弟が母親と親密であったり注目を浴びればそれはたちどころに姉の不安とわがままを引き起こす。落ち着いて母親に甘えたり、有能性を示したりということができなかったのではないだろうか。たとえば弟が積木を上手に作れば、途端に嫉妬に満ちた姉がそれを壊しに来るといった情景が想像される。患者にとって願望の実現とその破壊はまったく同じことで、別のこととは感じられなかったのではあるまいか。それが患者をして上に述べたような距離を置いた態度をとらせ、自己表現の満足を妨げたと考えられる。Waltersは「自分を弱く不全なものとして表さねばならない必然性」を指摘するが、圧倒的な能力を持ち、弟の成功に嫉妬の目を向ける姉との関係の中では、

それ以外に取りうる道がなかったのである。これが患者の競争関係の原型となった。青年期に至り周囲の人に攻撃的・競争的態度をとったのは、姉との同一化に由来するであろう。同胞同士がお互いを鏡として相互に同一化することで、自他両者のイメージが同時に形成されると上で述べた通り、姉の態度は「弱く不全な」弟の態度とペアで患者の心の中に生きていると思われる。この場合の競争心の性質は姉に由来するものであり、その過酷さは姉が弟の誕生を外傷として受け取ったその深刻さの程度を示唆するであろう。このように、同胞葛藤の観点から検討すると、この事例の患者のアパシーは姉との競争関係の反復であり、それゆえに患者が活力をもって自己表現する道が塞がれていることがひとつの因子であると推測することができる。さらに、姉と弟の関係を抱える父親と母親の役割も吟味する必要があろうが、それは本論の範囲を超えるので別の機会にゆずりたい。

3．破壊的競争心から生まれる世界

同胞葛藤において、その侵入の性質により競争の性質も決まってくることを論じた。侵入を首尾よく自と他、そして社会的関係の形成に結びつけることができれば、そこでの競争関係は生産的なものとなる。逆に「主体が母親的対象を再び見いだして現実の拒否と他者の破壊にしがみつこうとす」れば、その競争関係は破壊的なものになるであろう。このような破壊的競争心はどのような心的世界に位置づけられるであろうか。

Klein派の分析家Meltzer(1973)は、一般的な発達論ではなく精神分析のプロセスにおいて、上に述べた同胞葛藤に類比できる力動が生じることを観察している。それは原初的なよい対象（母親的対象に対応する）が確立されてはいるが、いまだその信頼性・安定性が弱い段階のことである。Meltzerはこの段階を「抑鬱態勢の入口」と呼んで、分析プロセスの中でも非常に重視している。この段階ではよい対象が大事なものだとはわかっているが、その関係が十分安定していないので、それを手放したくない、しがみつこうという動きが生じる。ところが心は生きており常に変化しているので、自分の心の中に、そのよい対象にとって不似合いだと思われる部分があることがわかってくる。またはよい対象との関係を壊してしまうと感じられる部分の存在が気づかれる。この形態は同胞葛藤と同じもので、Meltzerは、このようにそれまで分け隔てられていた部分の再現は、既存の心のまとまりにとっては「新しい赤ん坊」として体験されると述べている。それまでの心のまとまりにとって、新しい要素は統合を乱すものだが、それを受け入れていくことで、よい対象の安定性と心の複雑さを得ることができる。しかし、よい対象にしがみつこうという動きがあまりに強いと、心の新しい要素はよい対象をめぐる競争相手として破壊の対象となる。

Meltzerはこの破壊性を社会現象と関係づけて「暴君Tyranny」と呼び、次のように述べている。「私は抑鬱態勢の入口で、何度も何度もこの葛藤に出会ってきた。その時点では、原初的なよい対象に対する信頼と依存の到来は、依然としてそれら対象に関する“独占欲に満ちた嫉妬”と合流しやすく、分け隔てられた自己の悪い部分は外界表象に投射され、それに対する懲罰－皆殺しにまで至ることもある－が、権利として、忠誠への報いとして、信頼が持続するための必須条件として、要求される」。統合を乱す悪い部分は外界に投射される。実際の同胞葛藤でよく見られるのは、自らのわがままな部分を年下の同胞に投射し、自らは道徳的に厳格な態度でその年下の同胞を叱ることで親への忠誠を示すような場合である。これはエディプス・コンプレクス以降の成熟した厳しさとは区別されねばならない。社会現象では、集団のまとまりを維持するのに不都合な部分を内部の特定の人物や集団、または外部集団に投射して、実際にその集団を消滅させるに至る。「暴君に身を委ねることからうぬぼれが生まれ、暴君への屈

服から無気力(Apathy)が生じる」。これはすでに論じたWaltersの最初の事例の姉と患者の関係を想起させないでもない。この種の競争は、暴君になって万能的な力をふるう側になるか、その標的となって屈服させられるかの闘争になる。従って生か死かという過酷な性質を帯びることになる。

4．対象としての集団における競争関係

これまで主に早期の母子・同胞関係や二人関係における競争心の現れをみてきた。すでに述べたようにその形態は競争関係の原型をなし、その初版をどのように通過したかが、後の競争関係のありように反響する。この原型の活性化については、無論、個々の対人関係で生じてくるのを観察する機会が多いが、集団を空想の対象として考えると、そこでも同様の関係を観察することができる。集団状況は原始的感情を刺激しやすいことを指摘したのはBion(1961)である。集団状況で喚起された原始的感情は明確に意識されることが少なく、個々の対人関係の背後で動いていることが多いと思われる。特に大学生活では家族と学校以外にも、サークル・仕事などさまざまの集団に属することになる。それぞれに現実的・具体的な意義があるのは疑いなく、それはそれで考慮に入れる必要があるが、さまざまな集団の内的空想における意義も重要であろう。この場合、物理的にはどの集団にも属さないとしても、内的には何らかの空想として関係を持っていることになる。

Klein 派の集団療法家のGanzarain(1989) は、「グループは、そのメンバーたちにとっては母親的な対象になる」と述べ、それまでの記述の殆どが、グループの「よい母親」の側面を強調していることを指摘し、「悪い母親」の側面を論じている。この中で競争関係について触れているところをみることにする。ひとつは口愛性葛藤に関連して新しいメンバーの加入について、もうひとつはサドマゾキスティックな葛藤について述べている。

新しいメンバーの加入は、同胞葛藤と同様の状況を引き起こす。「新しい患者が加入するのは、家族に新しい赤ん坊が生まれたことにたとえられ、他の兄弟のアンビバレンスを刺激する。同じように、新加入者が母親グループの注意のほとんどを集めてしまって、自分たちにはその関心がまわってこないのではないか、という恐れによる退行をしばしば助長する。古株の何人かは新参者の不安に過剰に同一化し、彼（女）に対して過保護的になる傾向がある。他の人はグループの過去についての恐ろしい話しをして新参者を脅かそうとする。また別の人は、そのグループがいかに素晴らしいかを話して新参者を安心させるだろうし、またグループをけなす人もいる」。同じような状況は、サークルに新入生を迎えるときが典型であろう。新参者に過保護になったり脅したり、グループをけなしたりといった現象はよくみられることである。競争関係は顕在化しにくいが、グループがそれまで持っていた雰囲気と大きく異なる属性を持ったメンバー、特に何らかの点で卓越した能力を持つメンバーの加入は、それまでのグループのまとまりを乱し、その「よさ」を不確かなものにするので、集団規範を厳格に適用して密かにその力を削ぐといった、潜在的な形で起きていると思われる。いずれにせよ、既存メンバーは新入メンバーが加わる度に、グループを再定義する必要に迫られ、その際、グループの「よさ」は挑戦を受けていることになる。

サドマドキスティックな葛藤は次のようなものである。「このような反応はグループが規範や要求を押しつけ、特定の反応を期待するサディスティックな超自我として働いているという空想に基づいている。・・・メンバーは個としての同一性を失うという脅威を感じるが、それは彼らが同一性を持つかわりに特定のグループのメンバーという『規格』製品となることを求められているように思えるからだ」。これはかなり広くみられる現象であろう。過度に厳格な規律をもつグループは多い。「特定の反応を期待するサディスティッ

クな超自我」は前に述べた「暴君」にほぼ対応する。個々の同一性はグループの「よさ」への挑戦と感じられる。この不安を規範への過度の忠誠で置き換える現象はよくみられ、「よさ」をめぐる葛藤を維持するよりも、容易に「暴君」に同一化してしまう。そして規範からはずれた者には懲罰が加えられる。現実にはこのような雰囲気が薄くても、グループ所属をめぐって過度にそれを感じてしまう人もいる。そういう人はグループに所属しようとすれば過度に規範への同一化を刺激され（ここで苛酷な競争心も刺激される）、自らの同一性の喪失に脅かされる。そして逆に距離を取れば所属による安寧・満足が得られないことになる。さらに、物理的には所属しなくてもグループからの「はずれ者」として所属しているという空想は生きているから、「はずれ者」として内的な暴君に脅かされ続けざるを得ない。

このように、グループを相手としても競争関係の初版が刺激される。そこで再び自己・他者・社会の再定義が迫られることになる。その際には、常に苛酷な競争性、母親的対象へのしがみつきへの逆戻りの危険性を伴ってもいる。このような視点をグループにまで拡張することで、個々の事例の理解がより深まると思われる。

以上、競争性のテーマについて、スチューデント・アパシー、同胞葛藤、破壊的な競争性、集団における現れ、の各側面から検討してきた。競争性は、生産的に働けば、同一化を介して自己・他者・社会の形成、すなわち心の複雑さに向かう契機となる。しかし逆に内的な母親的対象の安定性が弱ければ、相手の破壊を目指すものとなる。全体を通じて、個々の人の中の、競争性の起源におけるいわば初版が、上に挙げた各側面に反響していることを示すことができたのではないだろうか。今後は、競争性の性質が決まる条件についてさらに考察を深めたいと思う。

文　献

青柳寛之　1995　自己心理学からみたスチューデント・アパシー－その病因と人格構造－　京都大学学生懇話室紀要　第25輯、P.19-28.

Bion.W.R. 1961 Experiences in Groups and other papers.Associated Book Pub.池田数好訳　1973　集団精神療法の基礎，岩崎学術出版社

Ganzarain,R. 1989 Object relations group psychotherapy:the group as an object,a tool, and a training base,International Unversities Press. 高橋哲郎監訳 1996
対象関係集団精神療法 ― 対象・道具・訓練の基盤としてのグループ ― 岩崎学術出版社

笠原　嘉　1988　退却神経症，講談社現代新書

Kohut,H.1971 The analysis of the self.水野信義・笠原嘉（監訳）1994　自己の分析，みすず書房

Kohut,h.& Wolf,E.S.1978 The Disorders of the self and their treatment:An Outline.International Journal of Psycho-Analysis,59,413-425.

Lacan,J.1938 La famille:le complexe,facteur concret de la psychologie familiale. Encyclopédie Française,Paris Larousse.
宮本忠雄・関忠盛訳 1986 家族複合，哲学書房

Meltzer,D.1973 Sexual States of Mind,Clunie Press.

Walters,P.A.Jr.1961 Student Apathy:Blaine,G.B.Jr.& McArthur C.C.(eds):
Emotional Problems of the Students.Aelton-Century-Crofts. 石井完一郎ほか訳　1971　大学生の情緒問題　文光堂　106-120.

ABSTRACT

On Rivalry

AOYAGI, Hiroyuki
Konan University

I discussed about "rivalry" from four points of view. First, according to Walters, I pointed out that patients suffering from Student Apathy have excessive rivalry. To make the impulse of rivalry constructive, tolerance of rivalry and aggressiveness, capability of realistic understandings of oneself, and the fusion of rivalry and kindness are needed. Second, I discussed about the relation of rivalry to conflict among siblings. In case rivalry has constructive consequences, self, other and the prototype of sociality are formed through mutual identification. Conversely, when intrusion of siblings is premature, it generates confusion and the siblings become objects which must be destroyed. I re-examined the case history of Student Apathy in Walters' paper. Third, I discussed about the destructive rivalry. According to Meltzer, I described the image of internal "Tyranny", which demands punishment of the split-off bad parts of the self as a reward of fealty to good primal objects. Finally, I discussed about the rivalry in groups. According to Ganzarain, I described the oral and the sado-masochistic conflicts in groups as a bad mother. Then I applied this model to some group phenomena in adolescence.

Key Words:excessive rivalry, conflict among siblings, formation of sociality